

インタビュー 自分自身の世界を広げるために

外国人が身近になることで、異文化との出会いが増える。

企業に求められる異文化経営とは。企業の経験を大学のキャリアに活かすには。

桜美林大学 教授 (国際経営)

前副学長 馬越恵美子さん

日本が国内から国際化する時代

——インバウンドをはじめ外国人が増えたことは、日本の社会にどのような影響をもたらすでしょうか？

一言で表現すると「内なる国際化」です。かつては日本から海外に出かけていく「外なる国際化」が主流でした。今は海外から日本に人が来ることによって、日本が国内から国際化する時代です。企業はもちろんのこと、社会の隅々まで国際化が浸透し、外国人が身近にいる生活が普通になります。いろいろな国籍、肌の色の人たちと共に切磋琢磨^{せつさたくま}することで、日本社会にも日本の企業にも活力がもたらされるに違いありません。

——ところが、コロナ禍で厳しい入国制限が課せられてこの動きはストップしてしまいました。

海外からやってくる人たちに感染させられるのではないかという怖さのようなものは、もちろん感覚としては分かります。でも、その結果、日本の大学や専門学校に入学したくても、数年も待たされる。なら、他の国に行こう、というジャパンパッシング。残念です。早く元の状態に戻るといいですね。

——異なる文化がぶつかり合うこともあるかと思えます。

当然、いろいろな弊害はあるでしょう。でも、誤解や違和感でぶつかり合うことは普通なので

す。分かり合えないところがスタートライン。じゃあ、そこからどうするか。まずは自分自身が抱えている偏見を自覚しなければなりません。そして、以心伝心ではなく、コミュニケーションを明示的に行うこと。つまり、お互いに心を開いて、思いを語る、相手の思いを傾聴する……。そのキャッチボールがコミュニケーションの醍醐味^{だいごみ}です。これは日本人同士のコミュニケーションでも同じですよ。夫婦、親子でも(笑)。

私はアメリカに留学していた時に、自己主張することを身に付けました。そうしないと自分の立場がなくなるからです。ところが、日本に戻って同じように自己主張していたら、居場所がなくなります。努力して臨機応変に合わせるしかないのです。

——先生は長年、異文化経営学会の会長を務めておられます。

それまで「文化と経営」という2つの領域を結びつけた学会というのは存在しませんでした。なぜ異文化経営学会を思いついたのか。それは私自身が長年、同時通訳として異文化の狭間で仕事をしていた時に、ビジネスの現場で、また経営の意思決定において、人の価値観や文化的背景が大きな影響を与える様子を目の当たりにしてきたからです。

異文化経営の定義は「多民族、多国籍、多言語、多文化の人々が構成する企業を経営しビジネスを行うこと」。ここでいう文化とは、目に